

平成 28 年 12 月 22 日 午前 10 時 30 分出火 150 棟 4 万平方メートル消失

新潟県糸魚川市 大火視察

12 月 25 日視察 防災住宅研究所 児玉所長、百年住宅 塩沢



強風により被害拡大

2日午前10時半ごろ、新潟県糸魚川市大町1丁目の中華料理店より出火。フェーン現象とみられる強い南風の影響で火災は広がり、延焼範囲は4万平方メートル150棟に及んだ。計744人に避難勧告が出される大火となった。

現場はJR北陸新幹線糸魚川駅のすぐ北側に広がる古くからの繁華街で木造の建物が多い地域。昭和初期や由緒ある古い建物が多い。消防庁の発表では、市街地での火災の焼損棟数としては、東日本大震災を除いて過去20年で最多の被害となった。

焼野原と化した市街地

新幹線を降りると、ホームでも火災現場特有の匂いが鼻をついた。駅舎3階にあるホームからは被災地を見渡すことができる。駅の日本海側出口にあるロータリーからは400m先の日本海を臨むことができ、大火はその西側一帯で起きた。

火災発生から 30 時間後、23 日午後4時半の鎮火から 2 日近く経過していたが、ライフラインの復旧工事と消防機関による調査が行われているのみで、個人住宅の復旧作業は見かけなかった。現地では被災者同士が互いを慰め合う姿や、被災した親戚、知人を見舞う方々をあちらこちらで目にした。その中で出会った市外から訪れた年配の女性から、「生家は火元に近かったが、鉄筋コンクリートのためほぼ無事だった」との話を伺うことができた。同様に、銀行や病院、東北電力などRCの建物は延焼を免れ、被災地の中にあつて既に営業を開始し復旧の拠点となっていた。一方で延焼した建物で原形を留めていたのもほとんどがRCだったが、隣家が全焼しても延焼しなかった築年数の浅い木造住宅も見られた。風向きと火の手からの距離、位置が明暗を分けた印象だ。



被災したWPC

火元から最も遠く離れた日本海沿いの国道 8 号線脇に建つWPC住宅は残念ながら全焼していた。築40年前後の大成パルコン物件だと、お会いしたオーナーさんに伺うことができた。ご両親が中古で購入し、この地に転居して来たとのこと。今後のことを尋ねると、数年前に火災保険が切れていて「保険に入らなきゃいけないと話をしていました。そんな時ほど、こんな被害に遭うものかもしれないですね」と仰っていた。当日は、火災発生 2 時間半後に、真白い煙が押し寄せ、室内にも入ってきた。出産後で里帰り中の娘さんと赤ちゃんを避難させ、戻ってきた時には規制され近づけなかった。鎮火の翌日に立ち入る事が出来たが、海側のキッチン部分を除き全て焼失。お父さんの形見の軍刀が無いか探しに来ていて、それを見つけたところで偶然にお会いすることができた。火元からは一番遠い海沿いなので、まさか延焼するとは考えていなく、何も家財を持ち出せて居ないとのこと。

内部の壁は、木質化粧合板仕上げの為、全て消失。内側のPC表面には煤も残っていない事から、相当な高温になり「煤切れ」の状態になったと思われる。建設当時、断熱に使われていたはずのグラスウールの残骸すら確認することはできなかった。外壁面には骨材膨張による爆裂が多数あった。



オーナーさんは、取り壊しをローンを組んで夫婦2人の平屋でも建てるしか無いと考えていた。WPC住宅の過去の実績として、火災に遭っても内外装工事のみで再建した事例が多くあることをお伝えしたところ、躯体再利用による再建は想像すらしていなかったと驚かれていた。

今回、WPC住宅は、延焼は免れなかったが原形を留めて形見はお守りした。石膏ボード下地の内壁であれば状況は変わったと感じた。当社のオーナー様にもこの事例を紹介し、火災保険切れの再加入と、木質合板仕上げを石膏ボードへ変更する工事を含めたリノベーション提案が急務と感じた。

これまで、阪神淡路大震災、東日本大震災などの巨大地震や、延岡・つくば市突風被害など10箇所以上の自然災害被災地の調査に訪れたが、人災と言える大火現場でもそれらと変わらない悲惨な光景が見られた。帰社後も、衣服や鼻の奥に残る火災現場の匂いを感じ、地震や津波、突風、土砂災害、そして大火と、あらゆる災害に耐え得る住宅の必要性和、その性能を追求した住宅を提供する重要性を改めて感じた。



強風により飛び火し海沿いまで延焼が広がる様子(左)と、鎮火後の状況(上)。赤丸が火元。青丸がWPC住宅※報道写真より転載。

被災地の様子



WPC住宅の様子

